

---

# ヘビメタ喫茶

メタかつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヘビメタ喫茶

### 【Zコード】

Z3012D

### 【作者名】

メタかつ

### 【あらすじ】

ジャズ喫茶はあるのに何でヘビメタ喫茶はないの？？？ないなら作ってしまえ！非常にくだらない物語です。感想頂けると助かります

## 1話 ヘビメタ喫茶

都内某所ここにはある喫茶店がある、店の看板には『喫茶HML』と書いてある。マスター曰わく『heavy metal love の略だそだ。メタル好きの間じやあ『ヘビメタ喫茶』の愛称で親しまれてるようだ。

まず店の外観…形はどこにでもある喫茶店のようだが全体を黒く塗つてあり、周りには無数のドクロが入室者を見ている……ドクロを抜けるといよいよ内部に入るわけだがドアの横に注意書きが『これより先命の保証なし』……親切なことだ。

内部に入るとまず全身白塗り、髪が真っ赤、鎖とトゲのヘビメタスキンを着たウェイトレスが出迎えてくれる。この店は夫婦と娘で営業してるのだが今は娘のようだ……どういう教育をしてるのか

……店はカウンター席とテーブル席があるがカウンターはヘビメタ許可証がないと座れないようだ。壁にはこれまでドクロとギターが飾らされている。

メニューを見てみよう！今日はとりあえず『鉄の処女ハンバーグ』を頼むことにする。ちなみに店内にはアイアンメイデンが流れている。何故このメニューにしたかわかったかな？

注文しそうに料理を持ってきた、人型ハンバーグとトマトと円柱状の金属（下には無数の針が付いている……不気味である。ウェイトレスが円柱状の金属の上にトマトをのせた。

次の瞬間……

「カアアアアオ…………ギキリーヨウ！キリーヨウ！

KILL YOU! KILL YOU

トマトを力任せに押している、金属の下からグチャグチャのトマトがおち人型ハンバーグにベットリ貼り付く…………おいしそうなハンバーグも台無しである。ウェイトレスは軽く頭を下げ去っていった。味は抜群にうまいのだが…………

食事を堪能したあと会計を済ます。帰りに塩をもらつた。魔除けだ  
そうだ……

もし街でヘビメタ喫茶を見つけたら一度入つてみてほしいDESS。

## 2話 彼氏がくる前編

「アンナ！もう起きないと学校遅れちゃいますよ～！」

「ママ～もう起きてるよ～」

アンナは髪を整えリビングに来た。やけに「機嫌そつだ。パジャマ姿のパパは

「おはよう」といいパンをほうばる。

ヘビメタ喫茶の2Fは生活スペースになつていて仲の良さそうな家族だ笑い声がいつもたえない。だが仕事となると3人は白目をむき発狂したように接客する……今の姿など想像できない……

パンをほうばりアンナは口を開けた。

「パパ、ママ実は私彼氏ができたの」

パパは黙っている。

「そつか。アンナも18さいだもんね！良かつたね～」

ママは嬉しそうに話した。パパも少し考え込むようにしてこう言つた。

「じゃあ今度パパに紹介してくれなあ。」

「うん！今度紹介するね～あつもうこんな時間、学校行つてしまーす！」パパとママは天使のような笑顔で娘を見送つた。

アンナは学校では生徒会長をしている。髪は黒くいつもボニーーテールスカートもひざ下。どこから見ても真面目である。

今日は放課後生徒会がある、その時事件は起こつた……

「今日アンナの家見に行きたい。」

アンナの彼氏、太郎が言った。太郎は副生徒会長でどこから見ても真面目君。アンナも最初は泣つたが太郎のあまりのしつこさについて了承した。2人はヘビメタ喫茶まで手を繋いで歩いた。太郎は嬉しそうにしているがアンナはどこか不安げだ。20分ほど歩いたとき太郎の足が止まつた、ドクロが2人を見ている……

「…………」

「やぱり今日は止めにしよう……私の喫茶店変わってるから、太郎君の趣味じゃないと思う」

「…………いや。個性的でいい喫茶店だよー僕個性的なのが好きだから」太郎はアンナの手を強く握りドアを開けた

後編に続く…

## 2話 彼氏がくる後編

扉の向こうには全身白塗り、トゲトゲースース、鼻輪をつけ真っ赤な髪を逆立てた化け物がこちらを凝視している。アンナの母である。「いらっしゃいませ……お一人様ですね……キシャオアアア……！」突然、奇声を上げた化け物の唾液が太郎の顔に降り注ぐ。

太郎は震えながらもテープルについた。

「い、今のがアンナのお母さんじゃないよね」

「ち、ち、ち、違うよ！ あの人は近所でも変わり者でうちでも困つてるので……」アンナはとっさに嘘をついた。店内には低音リフが響いているメタリカであつたが。太郎は知るよしもない。長い沈黙が続く……耐えられなくなつた太郎は

「何か食べよう」と言いメニュー表を開いた。

「…………」

絶句である。そこには今まで太郎が見たことないようなおぞましい言葉が並んでいる……  
その時……

「キシャアアアアアア……！」今度は後ろから男の奇声が聞こえた。男は何かに取り付かれたようにハンバーグを切り刻んでいるその間ずつと奇声を上げている。刻みが終わると男は

「四肢解体ハンバーグです……『じゅつくり』と言つた。太郎はその様子を黙つて見ていた。

「い、い、今のがアンナのお父さんじゃないよね？」

「ち、ち、ち、違うよ！ あの人は近所でも変わり者でうちでも困つてるの……！」

アンナはとつさに嘘をついた。太郎はホットした表情をしている。

すると先程の男がこちらに近づいてきた。

「いつも娘がお世話になつてます。娘の父です」もつアンナは泣き出しそうな顔をしている……太郎はパニックで言葉がでない……

「何になさいますか……」太郎はハツとして

「はじめまして太郎です！えへ～う～何かお勧めメニューありますか？」

「今日のお勧めですね。かしこまりました」

男はそう言うと去つていった。アンナは下を向いて涙を浮かべている、太郎は我に返り

「個性的で楽しいお父さんだね！」といいアンナの手を握つた。アンナは嬉しかつた。本当に嬉しかつた……

10分程たち先程の男（アンナの父）が料理を持つて來た……

「今日のお勧め『メタリカのアワビ、ワインナー添えFOCK YO U!』でございます。少々お待ちを……」

太郎の前にアワビを置いた、次の瞬間……

「キベリヤイアアア！！FOCK YOU！FOCK YOU！FOCK YOU！」

男の奇声と共にワインナーはグチャグチャに潰れアワビは真ん中から裂けた。息を切らした男が

「じゅつくり」と言うとその場を去つた。

「…………」

「…………」

太郎はあまりの衝撃で味がわからない、アンナにいたつては涙を浮かべて黙々と食べた。2人には重い空気が流れ会話もない。

「…………」

「…………あの……帰るうか…………」

太郎が言うとアンナは無言で顎き席を立つた。

店から出てからもアンナは下をむき黙つている、今にも泣き出しそうだ……すると太郎はすつとアンナを抱きしめた……

「僕はアンナが好きなんだ……お父さんがどんな人でもいい……」  
アンナが声を上げて泣いた。

「グスン……ごめんね……いつもは優しいお父さんなんだけど……グスン……仕事になると人が変わるの……」

太郎はアンナにキスをしてさらに強く抱きしめた。ヘビメタ喫茶の窓からは全身白塗りの化け物が2人を優しく見ていた……

太郎とアンナの恋はまだ始まつたばかりである。優しく見守つていてきたいと思う…………

『完』

### 3話 テレビに出る前編（前書き）

作品中では実在するテレビ局、女子アナに似た固有名詞が出てきますが。まったく関係ありません。フィクションです。

「現場の高島からのレポートでした～～バイバーイ～～」

「ハイOKです」プロデューサーがあや子にタバコを渡す。

「いやー今日もあやちゃん実に素晴らしい！あや子マジック炸裂だね！」高島は軽く頷き苦笑いをした。

彼女の名は高島あや子、藤一番TVの人気アナウンサーだ。今日のロケは『あや子の現場からこんにちわ』視聴者からよせられた投稿でロケ先が決まる生放送番組だ。あや子の人気と生放送のハプニングで高視聴率を獲っている。ロケが終わるとあや子とプロデューサーが明日の打ち合わせをする

「明日ちょっと変わった喫茶店に行つてほしいんだけど…大丈夫？」「プロデューサー…私はプロよ！仕事は選ばないって知ってるでしょ？」あや子が軽く舌打ちする……

「あつそうだつたね！あやちゃんごめん！ヘビメタ喫茶つてこんなんだけど、打ち合わせ無しでいつてほしいんだ。」

あや子が顔をしかめる、普通リハーサルをして本番に望むのだが：「なんかそのマスターがリハーサルなんてリアルじゃない！純粋なメタルを見に来てくれ…って訳の分からぬこと言つて……」

タバコの火を消しあや子が言った。

「自信満々の素人さんね、まあいいわ…私の技術で優しくリードしてあげるわ。」

あや子とプロデューサーはロケバスに乗り込んだ……

ロケ当日、この日は雲一つない素晴らしい天気だった。本番10分前まであや子はADに肩をもませている。手には資料がある。あや子が独自に調べたヘビーメタルの資料だ。あや子はいつも完璧な仕事をこだわる。努力を惜しまない。女子アナ界の頂点に登りつめて

も初心を忘れない。

プロデューサーがあや子の元に走ってきた。

「あやちゃんそろそろ本番始まるからお願ひね」あや子は

「ふう」つとめ息をして立ち上がった。もう一度資料に目を通す。

「よし！完璧ね！」

現場が静寂に包まれた…

中編に続く

### 3話 テレビで出る中編

「こなんにちわ～ 高島あや子です 今日は快晴！快晴！気分も晴れ晴れになりますねえ

私は今『喫茶HM』に来てます！別名ヘビメタ喫茶なんて呼ばれてるお店 ドクロさん達もこちらを見てますネ サツそく突撃

～～～

カメラが回るとあや子は別人だった。さっきまでの愛想のないあや子はもう居ない。この笑顔はどこか引きつけられる魅力がある。あや子はスキップで階段を登つている…

「さあ ドアを開けますよ～ 今日はどんなお店かな～」あや子は笑顔で扉を開けた。そこには全身白塗り、顔中にピアスをつけトゲトゲスースを着た化け物が立つていた。胸には『店長』と書かれた名札が付いている。

化け物は

「いらっしゃいませ」と言いテーブルを指さしている。女性のADの中には悲鳴を上げる者までいたがあや子は全く動じてない、これが高島あや子なのだ…！

「壁にはこれまたドクロがありますねえ ギターもある フライングVを見つけましたヨ BGWはやっぱリベビメタ！！！ガンマレイ

だあ

あや子が持ちえる知識をフルに活用する。勉強の成果がでている。あや子がテーブルにつくとすでに料理が置かれていた。

「わあオムライスだあ 私だく～～いすき！」

あや子が食べようとした瞬間オムライスの両端を素手で掴む男がいた。先程の化け物だ、あや子は何が起きたかわからない。

「キシヤアアリュベエア - - - - !！」

突然の奇声と共にオムライスに両端から圧力をかけていく……

ベチャ！

綺麗だったオムライスが真ん中から吹き飛んだ。あや子の顔には化け物の唾液とチキンライスがへばり付いている。

「本日のお勧め『悪魔のもおし子、オムライスの『压死』……で』」ぞいます。ではお食べください」あや子は一瞬ハツとして平常心…平常心…と心の中でつぶやいた。オムライスをすくい一度カメラの前に向ける。

パクリ！

「わあ～おいし～い！

フワフワ卵とチキンライスのバランス絶妙ですよ。チキンライスは少しパサパサ系かな。これが卵とよく絡んで口に入れた瞬間フワアて全体に広がります～」

口からでまかせである。グルメのあや子にとっては中の下と言ったところだ。まずい料理を食べてどうつまみく見せるか……腕の見せどころだ。

「マスター この料理のポイントはズバリ？」

正直ポイントなどないと思つていいのにでもある普通のオムライスだ。化け物はニタアと笑つた

「この料理のポイントはオムライスを均等な圧力で潰すことです。」

「本当おいしいですヨ」あや子が遮るように言つた。こういうバカはもう質問しないことに限る。ふと横を見るとプロトコーサーがカンペを持っているのが見えた。

後編に続く

プロデューサーがカンペを握りし、手を振つてこる。

『数字 もつ一品注文、過激なのいづれ。』

あや子にひとつはたまつたものじゃない、また訳の分からぬ物を食べさせられるのか……心中ではもう帰りたかったが彼女には女子アナ界の帝王といつぱりライドがある、逃げ出すわけには行かなかつた……

「おこしかつたあ あや子あまつて美味しだらもつ一品食べたくなつちやつたあ」

あや子は一通りメニューを見る。うん…これが過激そりねー……そつ心の中でも呴くとあや子は意を決した。

「マスター」の『ドッケンとロールキャベツの内臓爆破』ぐださい 「そつ言づと化け物は軽く頭を下げ厨房に消えていった。10分程たつと化け物は料理を持ってきたあや子の前に出す。どこからみても普通のロールキャベツである。

「開きます……」化け物はキャベツをナイフで切り開いた。

「ヒツー！」あや子が一瞬悲鳴をあげてしまつた……そこには肉とこんなやくで作られた内臓まがいの物が顔を見せてこる、あまりのおぞましさに嘔吐するアドまでいる。だがさすがは高島あや子だすぐには笑顔になる。

「すつづーいーいーみく作りましたね マスターは手が器用なんだあ

」

すると化け物は仕上げで『やこます…』と言い内臓に爆竹をおしこんだ。あや子の顔が一瞬凍りついた。

次の瞬間……

ボンッ！！！

ビシャアアアアア！！！

爆竹によって吹き飛んだ肉片があや子の顔に降り注ぐ服にまで肉片は張り付いている。

人気女子アナの顔は化け物の唾液、チキンライス、こんにゃく、肉片で汚れさらに飛び散ったケチャップで見るも無惨な姿を晒している。綺麗なロールキャベツが今は小動物の死骸にしか見えない……だがそこは高島あや子である。何事も無かつたように食事をしている

「おいしい 始めて形のないロールキャベツたべましたあーさつきの爆破はソースを絡めるためにもあるんですね」化け物も満足そうな顔を浮かべている。

そろそろ番組も終盤に近づいてきたあや子はスプーンを置きお店の紹介をしているプロデューサーは時計に目をやっている……お店の紹介をし終えるとあや子は時計に目をやつた。番組もクライマックスである。

「今日も残念なことにお別れの時間がやつてきました……。ヘビメタ喫茶皆さん一度来てねえ バイバイイー」

「…………」

「…………ハイイOK！」遂に収録も終わった現場は一気に安堵の表

情を浮かべる。顔を汚物で汚したあや子もほつとした様子だ。気を許した瞬間顔に痛みが走った。なんと先程の化け物が塩を投げているではないか！！

「キシャアアアアー！！  
キシャアアアアー！！」

白目をむき一心不乱に投げつけてくる。あや子は黙つて耐える。目には涙を浮かべて……

投げ終えると化け物は魔除けですと一言いった……  
あや子はポタポタと涙をこぼした。そして一人無言でロケバスに乗り込んだ。後ろからオロオロとプロデューサーが追いかける。

ロケバスの中で1人足を抱え泣いているあや子がいる。プロデューサーがそっと彼女に近づく……

「あやちゃんごめん……僕もあそこまでイカれた喫茶店とは思わなかつたから……何がヘビメタだよ  
」

あや子は黙つて聞いている。

「これで涙を拭いて。せつかくのお顔が台無しだよ。」

あや子は顔に付いた汚物をぬぐつた。そしてプロデューサーを睨みつけた

「プロデューサー、何か勘違いしてませんかこの涙は私自身の涙です。今日の私は女子アナ失格でした。なぜならロールキャベツを爆破した時、軽い悲鳴を上げてしまった、正直平常心でいられなかつた……

女子アナ足るものいつでも平常心でいなければいけない！だからこの涙は自分自身の情けなさからきたのです……」

そう言うとかるくため息をつき窓を眺めた。あや子はそつと呟いた

「私もまだまだね。  
『…………』と

『完』

### 3話 テレビで出る後編（後書き）

女子アナの職業は一見華やかに見えますが、実際はつらくストレスもたまる職業だと思います。

この物語は極端ですが、これに似た仕事もあるでしょう。

高島アナは個人にお気に入りなのでまた再登場させたいと思います。感想いただけると助かります。

## 4話 萌と鎌

この光景をどう解釈したらいいのか……

ここは都内某所メイド喫茶『萌えるんだ』。最近できたばかりの人気店だ。お店の前には男が食い入るように凝視している。ピンクの外観、周りにお花、看板はハートの形をしている。男は入りたいけど勇気が持てない様子で体をクネクネさせている。この程度ならよくある話しだ、問題なのは男の服装である。

男は全身白塗り、顔中にピアス、トゲトゲスーツで身を隠す……そつヘビメタ喫茶のマスターである。周囲は獣臭さえただよっている……

話を30分前に戻そう

時刻は9時を回ったヘビメタ喫茶のカウンターにはひとりの男性が座っている

「キングお久しぃぶりですね……」

「おう、マスター！ テレビみたぜ！ アヤ子パンかつわいいなあ！」  
キングと呼ばれる男性はこの店の常連だ。すでにヘビメタ許可証を持ちカウンターで食事できる身分である。2人は前のテレビ取材の話で盛り上がった。食事を終えた後キングは呟いた。

「店前にメイド喫茶できたなあ……この前いつたんだが良かつたぜえ！ 今度マスターも行ってみたら？」 そう言うとマスターはキングが言つながら……と言い走り去つた！ 店はアンナとママに任せてある……

……と言つわけで今メイド喫茶『萌えるんだ』の前にいるわけだ。  
マスターは勇気をだして扉を開いた。店内には3人の客がいる。案の定オタクだ。1人のメイドが化け物に氣づいた。

固まっている……

そりやそうだ。扉の向こうには全身白塗りの化け物がメイドを凝視してるので……すると化け物はメイドの前まで歩いてきた。蛇に睨まれた蛙状態である……

「キシアエウ…………客がきたら『お帰りなさいませ』主人』つて言うんじゃねーんか？」

化け物の唾液がメイドの顔に降り注ぐ。たぶんこのメイドは女子高生だろう名札には『萌子』……と書いてある

「お、お、お帰りなさいませご主人様……えーと……こちらへどうぞ」化け物がドンっと椅子に座る、客は恐怖で逃げ出した、お金も払わず……

他のメイドたちも恐怖で裏で震えている。

「萌え萌えハンバーグ」化け物は破棄捨てるよつこいつた。萌子は注文を確認し逃げるように戻ってきた。

「何の人！……怖い！頭おかしいんじゃないの？警察警察」「他のメイド達が騒いでいる。萌子は不安そうな顔をしている……

「萌子！あの化け物の接客はあんたに任せたよ！あんたトロいんだから、こういう時しか役に立たないからね！文句ある？萌子はありません……と答えた。萌子はいじめられている……嫌な仕事はすぐに任せられる……一人をばばにする……女性社会の厳しい掟だ。

「萌え萌えハンバーグだ萌え～」萌子は化け物の前にハート形のハンバーグを置いた。化け物は萌子を舐めいる様に凝視している、萌子は恐怖で動けない……

「キシャアアアア！…………」化け物は突然、奇声を上げハンバー<sup>グ</sup>を切り刻む！萌子は化け物の殺意を感じ取ったのか一心不乱に逃げようとした……

ガツ！

ビターン！

萌子は化け物の服から垂れ下がった鎖につまずき転倒した。化け物は急に立ち上がり萌子に近づいてくる……

「いやあ……」ないで……いやあ……

萌子は涙を浮かべ訴える……化け物は萌子の前でしゃがみこんだ。

「！」

萌子は悲鳴を上げる... といろが化け物は思ひも寄らぬ!」とを口にした...

一 良かったのががなくて、本当に良かった。」

「  
」

萌子の顔が見る見る赤くなつていく心臓の鼓動が聞こえそうだ。萌子は軽くおじぎをし戻つていった。

「萌子あんた！本当にトロいねえ！…………つてちょっと聞いてんの  
？」「萌子は他のメイドの声など聞こえていない。頭がボーとする。  
「意外と優しい所あるんだあ～……」うれしそうに萌子が呟いた。そ  
の時店内に奇声が響き渡った…………

「あつ彼が呼んでるわ 行きやなきやー」

「どうぞ、ミソニア

「……」の『萌え萌えジャンケン』をやりたいんだが……」

白塗りの化け物は少し恥ずかしそうに言った。萌子は満面の笑みを浮かべる。

「じゃあこきますよお……

萌え萌えじゃーんけん、じゃーんけん

「キシャアアアアア！……！」

化け物の突然の奇声で萌子は軽くキャッと言い、からだをクネクネさせている。

「お客様そこは『萌えええ』って言つんだよ。『キシャアアアアア！』じゃないよお」化け物は「メン」と言い体をクネクネさせている。「お客様さんが『チヨキ』で私が『パー』お客様の勝ちーー勝ったごほづびは私とプリクラです」

萌子は化け物の手を引っ張りプリクラの中へと入る。萌子は丶サインをしているが横を見ると化け物が指で悪魔の角を作っていた。萌子もそれに習つて指で悪魔の角を作つた。最後に仲良く奇声を発した。

23

……

時刻は午前2時、仕事を終えたメイド達は仕事のグチを言い合つている。萌子は後片付けをしている……いやさせられている。1人、1人とメイド達は帰つていった。

午前3時、ようやく後片付けを終えた頃には萌子ひとりになつていた。

化け物が帰るとき萌子は手を握り

「また来てくださいね」と言つた。

外は満開の星空が萌子を照らしている、その時西の空から星が流れ

た。

「また彼に会えますように……」

萌子はそう呟くとスキップして家に帰つていった

これは後日談だが、萌子は彼のことが忘れられず、ヘビメタ喫茶のウエイトレスになるのだが…………それは別のお話。

『元』

## 4話 萌と鎌（後書き）

この作品はドジで「しバカだけ」一生懸命仕事をする女の子キャラが欲しかったので作りました。マスターとの恋は作品を作っていて思いつきました。

この作品は自分自身楽しめて書くことが出来ました。どうだったでしょうか？

## 5話 好きだからー（前書き）

2話の続編です。

この作品は太郎が好きな子のためにヘビメタを勉強しのターまで買つてますがほぼ実話です（笑）

## 5話 好きだから！

男はCDを入れた。そこから流れるのは不可解なノイズ、ボーカルの奇声、耳障りな低音リフのオンパレードである。男にとつては不快極まりない……

「これもアンナのためだ！……」男は咳く……

男はもともとがぐや姫のようなフォーコソングが好きなのだ、頭が痛くなつてくる……

男は壁に目をやる、そこにはポスターがびっしりだ。キッス、イングウェイ、メガデス、レーサーX……みな白目を向き男を凝視しているようだ。

男にとつては不快極まりない……

「これもアンナのためだ！……」男は咳く……

男はもともと麻木久仁子や伊藤かずこのような熟女が好きなのだ。頭が痛くなつてくる……

男は窓際に目をやつた。そこにはエレキギターが置いてある。Ibanez マーティフリードマンモデル……である。買つたのだ。楽器屋に行つて

「ヘビメタぽいギターください」と言つたら買わされた、アンプ、ケーブル、エフェクター、チューナー、音叉、布袋フィギア、ピックアップ、ミキサー、イコライザー、研磨剤も買わされた。だつて店員があつた方がいいって言つから……

(わからない人ゴメンナサイ。エレキは基本ギター、アンプ、ケーブルで音はでます。他は必要ないものです、でもエフェクターはあつた方がいいかな)

男の名は太郎、そうアンナの彼氏である。太郎はヘビメタ喫茶にい

つてから変わった。アンナの父に自分を受け入れてもらつために、  
ヘビメタを勉強する。

太郎としては苦痛でしかないがアンナのためだ…

太郎はギターを手に取つた。

「え～とまずG#…と」

モコッモコッモコッ

「難しいなあ…」

ギター初心者の太郎は弦がしつかり押さえてないので mute (消音) してしまつ。（ちなみに練習してるのは KISS / BLACK DIAMOND 初心者おすすめ）その時、もの凄い勢いで扉が開いた。

「太郎！ うるさいーーー！ 耳障りな音出すな」

「ママ～…」

「何ロック聞いてんの！ いつから不良になつたの！ こんな子うしの子じやありません」

「ママ～…」

太郎はしゅんとなりギターを置いた。僕だつて好きでやつてるんじゃない。と呟いた。

（いつの時代もエレキは嫌われ者… ですね。）

翌日……

キーンコーンカーンコーンキーン……

「あー今日も一日お～わつた！ ん？ アンナまだ勉強してんの？」

「うん 今日の授業ノートに一度まとめようと思つて 加奈ちゃん  
も「お帰り?」

「帰るよ、でも真面目だなあ。さつすが生徒会長!」

アンナは少し恥ずかしそうにテヘヘと笑つた。加奈とアンナは談笑  
していると太郎がやつてきた。

「ヒューー ヒューー!! アンナの彼氏がやつてきた やつてきた」

アンナが太郎に氣づく

「太郎君、ちょっととまつてねえ~」

アンナが嬉しそうに言つた、すると太郎が得意げに言ひ。

「イングウェイ・マルステイーンつていいよね! あの早弾き最高だ  
よね! とくにネバーダイがいいよね!! ヘビメタ最高!!」

突然である。なんの前触れもなく太郎は言つた。しかもなんの感情  
もこもつてない棒読みである。その場が凍りついたのは言うまでも  
ない。

「たつるつー何訳の分からないこと言つてんの? ヘビメタ? だっさ  
ださだよ!! イングなんとか? わかんねーよ! アンナも言つたで!  
太郎頭おかしくなっちゃったから。」

するとアンナは立ち上がつた、目がキラキラ輝いている。

「イングウェイ・マルステイーン、スウェーデン出身。78年『ラ  
イジングフォース』でデビュー。クラシックを基盤とした超早弾き  
で人気をはくす。なお98年には初のフルオーケストラ『変ホ単調  
新世界』を発表しネオクラシカルの新たな可能性を教えてくれた。  
代表曲は『ウェンジエンヌ』、『トリロジー』……など」

その場がさらに凍りついた。加奈は口をあんぐり開けて固まっている……太郎とアンナは見つめあっている。加奈はようやく冷静になりました

り口を開けた

「ア、アンナ詳しいね…………」

「だつてウェイ様は私にとつて王子様だもん」アンナが恥ずかしそうにエヘヘと笑つた。

「そ、そ、そうなの？人は見た目によらないね…………私帰るわ…………」

加奈は頭をポリポリさせ帰つていった。

アンナは嬉しそうに私達も帰るといい手を繋いだ…………

帰り道もヘビメタ談義で盛り上がつた。と言つてもアンナの話はマニアックなので太郎は理解できない、時々うんうん、と頷いている。最後にアンナは言った

「今日、すつしぐ嬉しかつた。太郎君とヘビメタ語れるなんて…………夢見たい…………」

太郎は軽く頷きそつと抱きしめた。強く抱きしめたのだった…………

『白塗りの太郎』……に続く

## 5話 好きだから！（後書き）

今回よりメタルとエレキの小ネタ話を入れていくつもりです。これを読んで少しでもメタルに興味を持つてくれたら光栄です。

## 6話 白塗りの太郎

太郎は自分の顔を鏡で見て満足感に浸っていた。洗面台には絵の具が無造作につまっている。

「アンナ」これでお父さんも受け入れてくれるか？」

そう、太郎は遂に越えてはならない一線を越えてしまったのだ。絵の具で白い顔を白塗りにしてしまつた…さらに黒い革じやんまで着ている。

セイジマツカシカミテサタ

「た、た、太郎！あんた何やつてんのおおおお～～～！！！！！」

「アヤシ」

絶句である。そりやそうだ。」の前まで副生徒会長で絵に描いたような真面目君が、今は白塗りの化け物に変身しているのだから。

「あんた頭大丈夫！」

太郎が少し恥ずかしそうにテヘヘと笑った。ママは汚物を見るような目で太郎を見ている。

「太郎！一緒に病院いこおおーーー！」

「ママ……これもアンナのためなんだ。変な目で見ないでよ……」

「アンナちゃん？生徒会長で真面目で可憐で清楚で大和撫子なアン

ナちゃん？

あんたの白塗りと何が関係あるのよーーー！」

ママは太郎を罵倒している、化け物、化け物と罵倒している。太郎は最初黙つて聞いていたが、遂にヒューズが切れた……

「キシヨアアア！！！ママなんて嫌いだ！！！」

太郎は走つた。突然の奇声で転倒したママを残して……

太郎は走つた！

あれから毎日ギターを弾いた、指の革は破け血が出るまで弾いた……

太郎は走つた！

あれから毎日ヘビメタを勉強した1日5時間……

太郎は走つた！

あれから毎日ヘビメタを聞いた、好きだつたフォークソングのCDは捨てた……

そして全身白塗りましたのだ……アンナの父に認めてもらうために。太郎はヘビメタ喫茶の前に立つた。ドクロがまるで太郎を招き入れるよう見ている気がした。

「アンナ！僕は君のために変わったよーー今の僕ならヘビメタ喫茶に入る資格はあるよね？」

お父さんも……受け入れてくれるぞ……」

太郎は強い決意のもと扉の前に立つた。

「ふう……」

「呼吸おく……」

ガチャツ！

「いらっしゃ……えつ太郎君？」

白塗りアンナである、太郎の変貌をまじましと見ている。太郎はどこか誇らしげである。

「アンナの白塗りすがた……似合つてゐよ。お父さんいるかな。」太郎は少し照れながら言つた。アンナはテヘヘと笑い奥に入つてつた。

「パパ～！太郎君がきたよお～」

すると奥からアンナはマスターをつれて戻ってきた、マスターは太郎の姿を凝視している…

「キシャアアア～！」突然奇声を上げて太郎にあるものを渡した。

ベビメタ許可証である。

「パパ～」アンナは涙ぐんでいる。

「太郎君これはね『ベビメタ許可証』と言つて信頼できる常連さんにしか渡さない物なの…

カウンター席で食事できるんだよ。パパは太郎君のこと認めたつてことなの……」

太郎は嬉しさのあまり震えている、マスターが太郎の肩を叩く

「太郎君！今日はゆつくりしてつたらしい。」

アンナの肩も叩く

「アンナ、今日はもう上がつていいぞ！」

そう言つとマスターは奥に消えていった。アンナと太郎は仲良く力 ウンターに座つた。カウンター席にはキングが座つてゐる。

「おう坊主仲間だな！」

キングは太郎の肩を叩く、アンナはキングはこの店の常連さんだと紹介した。

とても楽しい時間が過ぎていく。2人は夢を見ているようだつた。太郎はアンナを見つめたアンナはキャとクネクネさせる。ベビメタの話題で盛り上がる、実に微笑ましい光景である。

2人はエレキの話題に移つた……

「太郎君のギター Ibanez 何だすつぐーい！ねえ ねえ 何弾いてるの～？」

「イングウェイ・マルスティーンだよ。結構うまいんだぜ！」

「ウェイ様弾けるの！すつぐーい」

口からでまかせである、ギター始めたのは一週間前だ、イングウェイなど弾けるわけがない、ただアンナに気に入られたい一心でついた嘘である。男の悲しい性である……

「ねえ…太郎君のウェイ様聞きたいなあ…」

アンナは目を輝かせている。この展開は非常にまずい…

「えっ！で、でもギター持つてきてないし！」

「…………聞きたいなあ…ギター壁に掛かってるの使つていいよ…」

まずい、まずい…

さらに追い討ちを掛けるようにキングが言った。

「坊主イングウェイ弾けるのか！すつぐーなあ おーいみんな、坊主がイングウェイ弾けるつてよ」

周りがざわついている…この展開はまずい！

非常にまずい！！！

すると白塗りの顔をしたマスターが満面の笑みで太郎に近づいてきた、右手にはギターを持っている、太郎の顔が青ざめてくる…

「太郎君、気を使わなくていいよ。このギターはIbanezピカソだ、私のお気に入りの一本だが、君に弾いてもらいたい」  
太郎の手には幾何学模様が鮮やかなギターを持たされていた。マスターがアンプを繋いだ。最悪である！店内中、太郎を注目している、太郎の目には涙が浮かんでいる……

一瞬の静寂……

アンナは小声で頑張つてと言つてはいる……

「…………」

「…………」

太郎はもう引けなかつた……なかばヤケクソである  
「え……KISSします」ピックを持つ右手は震えている……

モツモコッ……

「…………」

モツモコッモコッ……

「…………クスクス」

失笑である。どこからかヘタクソ……と聞こえてきた。マスターが太郎の肩をポンと叩いた。太郎はギターを返す、恥ずかしさと情けなさで涙がこぼれ落ちる……

その時……

『ギュワーン！……ダララララー――――』一気に店内が歓声に包まれる！マスターである！手にしたギターをかき鳴らしているのである！――半端でなくうまい！

エイトフィンガー、タッピング、スワイープ……高等技術のオンパレードである！

店内は奇声に包まれる！口から泡を吹いて興奮している者までいる！！！その時キングが壁にあるギターを手にした、Gibsonレスポールカスタムである！――キングがステージに上がる！――

『ギュワーン！――』

こちらも半端でなくうまい！すると今度はマスターがアンナを手招きしたアンナは壁にあるギターを手にした、モノトーンのGibson フライングVである！――アンナがステージに上がる！――

『キューイーン！――』

こちらは2人と違つてボリューム演奏、クウォーターを多用した鳴きのギターだ！もちろん半端でなくうまい！――

3人は発狂したように白目をむき奇声を上げ演奏した。客の興奮もピークに達する、泡を吹いてる者もいれば、全身をかきむしってる者もいれば、興奮して全裸になる者もいる！

ジャン！

「……」

3人のジャムセッションが終わった。客はもう一度大きな歓声を上げる。太郎は立ち尽くした。涙がポロポロ落ちる…

そりやそうだ自分のヘタクソなプレイの後、あんな超絶プレイを見せられたら…惨めでたまらなかつた…太郎がアンナをじろりと見た。

「太郎君まつて！！！」

7

「お願  
い！  
！」

「」

太郎が立ち止まつた。

「…………僕は君のことが好きだつた…君の事をもつと知りたくてヘビメタを勉強したんだ……」

「嘘だ！じゃないと僕のヘタクソプレイの後、あんなプレイ……で  
きつこない！僕は惨めでたまらなかつた！」

「『めんなさい』でも私、太郎君が好きだから……もし太郎君がホップス好きなら私ホップス好きな女になる……もし太郎君が演歌好きなら私演歌好きな女になる……」  
アンナは涙をポロポロ流し、声を上げて泣いている、太郎が我に返る。

「うん… ここ興味た… アンナの気持ちを邪魔すこし、本物に」うん

「ううん……私は、太郎君の気持ちも考えずに……本当に」めんなさい……

太郎とアンナは見つめ合い抱き合つた。  
涙で白塗りの顔は酷く汚れているように見えた……

人は恋をすると周りが見えなくなる…  
全てを犠牲にしてでも恋に生きようとする…  
たとえ悲しい終わりになるとわかつても恋をせずにはいられない。

恋とはそれだけ魅力的なものなのだ…

『完』

7話 ミキティと鎌 前編（前書き）

藤原美姫は架空の人物です。

## 7話 ミキティと鎌 前編

8年前…ひとりの天才スケーターが現れた。名前くらいは聞いたことがあると思う、そう藤原美姫である。彼女は15才で女子初となる4回転を成功させ、一躍時の人となつた。しかし彼女の苦悩はあまり知られてはいない……

8年前、大須スケート場……

パンツ！…美姫の頬が赤く腫れわたる

「何度もいつたらわかるんだ！軸が安定してないから跳べないんだ、ちょっとは頭使えよ！」

「…………はい……」

「本当4回転跳んだの？信じられないな～口口口口転びやがって！…わかつたらスケート場にもどつて！」

美姫はスケート場に戻つた。しかしジャンプは成功せず何度も転倒する。瞳から涙がでてくる……

「はいはいはい、今日の練習は終了了！…！

頭使わない奴は  
と・べ・ま・せ・ん！

スケート場の中央では美姫がひとり涙をながし座り込んでいる。どれくらいの時間が流れたか…

美姫は涙を拭きスケート場を後にした。

「藤原選手！藤原選手！ＮＨＫ杯の敗因は何ですか？4回転挑戦しませんでしたね？自分に足らないものなんだと思いますか？」

マスコミである、美姫は逃げるようになつた。帰り道、コンビニに立ち寄る。

「120円になつます……あの藤原美姫さんですよね4回転の？」

美姫は軽く頷いた、回りも

「4回転の美姫だ」

「本當だ4回転娘だ」と騒いでいる、美姫は逃げるようにして帰つた。

4回転を成功させてから美姫の生活は変わつた。期待の新人ということでスケート連盟からは一流コーチを付けた。毎日マスコミが追いかけてくる…

回りの人も

「4回転」と声を掛ける。美姫は人間が信じられなくなつてきていた。

翌日

「マキティ……最近疲れてない？」

「こゝは中京高校、美姫を4回転と騒ぐ輩があおいなか彼女だけは違う。

「ありがとうね。純子……大丈夫だよ」

彼女の名前は八木純子と言つ。美姫の幼なじみで大親友である。回りの生徒は4回転と騒ぎ、見る日が変わってしまったが純子だけは今まで通り美姫と接してくれる。美姫にとつては純子との会話が何より心休まる場面である。

「ネエ、ネエ～ミキティ私、昨日面白いもの見つけちゃったー～ミキティ、帰り見てかない？」

見てきたいのは山々だが美姫はスケートの練習がある。美姫は純子の誘いを断ろうとしたが……

「ミキティーたまには息抜きも必要だよ～最近ずっと練習じやん…」

純子は少し怒つたような口調で言つた

「…………」

「…………ねえ、行こ？」

「…………そうだね！行こう！練習なんかさほっちゃえ」

純子は笑顔でヨシャーと言い学校を後にした。

2人は20分ほど歩いた美姫の足が止まる…

「…………純子、まさかここが面白い所？」

美姫の前には黒塗りの建物があり、ドクロが無造作に並んでいる、見上げると『喫茶HML』と書いてある。純子は美姫の顔を見た。

「ミキティは世間知らずの所あるから…世間にはミキティの知らな

い所もいつぱいあるんだよ、ここの人たちは誰も美姫の事知らない  
…気分転換にはいいと思うよ」「

純子の言つとおりである、美姫は物心のついたときからスケートをやつていた…いややらされていた。スケートだけではない書道、英語、ピアノ、バイオリンもやつてある友達と遊ぶ時間もなかつた、音楽はクラシックしか知らない程のお嬢様なのだ。

美姫は少し考え込みわかつたと言い階段を登る…純子はドアノブに手をかけた。

ガチャ！

「キシャアアヤアアオ――――――！」

突然、白塗りの化け物が奇声を上げた！顔中ピアスの化け物は唾液を垂らし白目をむき2人を凝視している。美姫は恐怖で震えている。

「マッスター 美姫はヘビメタ初心者だから驚かさないでよ～」

純子と化け物は楽しそうに談笑している。その光景が美姫にとつては滑稽でならない、化け物は2人をテーブルに案内する。

「なかなか変わったお店でしょ？」

純子が言った。美姫はキヨロキヨロ落ち着きのない様子だ…

美姫にとつては初めて目にする物ばかりである。耳をつんざく低音リフ、6本の弦でできたエレキギター、全身白塗りの人間…美姫はまるで異次元に来たような不思議な感覚になつた。横を見ると純子がメニューを見ている…

「ミキティ、ショジョハンでいいかなあ？」

「え？何？ショジョハンって？」

「鉄の処女ハンバーグの略だよ～知らないの？」

美姫は自分が常識無いのかなっと思った。注文して10分ぐらいで先程の白塗りの化け物が料理を持ってきた…

美姫は目を丸くさせる、人型ハンバーグである。さらに化け物はトマトと金具を手に取つた…

金具はトマトがすっぽり収まるような円柱状だ。周りに無数の穴があいている、下には鋭い針…

上を見ると取つ手がついていてピストンさせる仕組みになっている。化け物はトマトを金具に押し込む…

「キシャアアヤアア！」

突然の奇声と共に力任せにトマトを潰し始めた、グチャグチャになつたトマトが人型ハンバーグにベットリ張り付いた。トマトを潰し終わると化け物は頭を下げ奥に消えていった。美姫は不思議と恐怖、気持ち悪さは感じなかつた。

2人はゆつくり食事を食べる…意外につまいすると純子が優しく話し出した。

「ミキティ、ここの人たちはね藤原美姫の事知らないよ、ここの人たちはヘビメタしか興味ないからね」

純子の言つとおりだつた、一度も4回転の藤原、4回転娘…と言わぬでない…美姫は久しぶりにスケートの事を忘れ大声で笑うことができた。美姫は次の日もヘビメタ喫茶に通つた…

その次の日も

その次の日も

ヘビメタ喫茶に通つた。気が付いた時には『ヘビメタ許可証』を持

つていた…

美姫にとつてヘビメタ喫茶に居るとき」こそが4回転の藤原美姫から女子高生藤原美姫に戻れる瞬間だつた。

次第に美姫はヘビメタ喫茶に自分の居場所を求めていくようになつたのだつた…

そして美姫は女子スケート界の歴史に残るどんでもないことを思いついてしまつ…

中編に続く…

7話 // キティと鎌 中編

時刻は23時を回った。ベビメタ喫茶ではマスターが閉店の準備に取りかかる。カウンター席に女性客が一人。藤原美姫である。すでに見慣れた光景だ。

「マスターまた私怒られちゃたよ、みんな私を買いかぶりすぎ！4回転なんかまぐれなのに」

マスターは黙つて聞いている。

「本当にんなちやう、どこ行つても4回転、4回転……それしかないんか！」

「…………」

「まあ……実際問題それしかないんだよね、私には表現力もないし……」

「…………」

「ママは『美姫はやればできるナ』……だつてえー……はあ……4回転なんかやらなきゃよかつたなあ……」

「…………」

「…………スケートやめひやおつかなあ……」

「…………」

「辞めちゃえば？」

マスターから思いもよらない言葉が返ってきた。美姫は口をあんぐり開けている……

美姫は小さい頃から親から『継続は力なり』、と教えられてきた……

どんなに辛くても辞める事は出来なかつた。美姫にとつて『辞めちやえば』……

青天の霹靂である……

マスターは食器を置き美姫の横に腰掛けた。

「君はスケートをやつているのか、やらせているのか？」

美姫は無言である……

「ミキティを見ると好きでやつてるよつには見えない……私は正直スケートは分からぬ、ミキティがどんな人かも知らない……

でも一つだけ言える事がある」

マスターは一本のギターを持ってきた、塗装は剥がれトーンコントロールは割れている、ボロボロである。

「フルナンデス、ストラトキャスター……コイツとの出会いが私の人生を変えた……

「…………」

「中学1年の夏、私は女にモテたいがためにギターを買った……最初はそんな動機だった……

でもアンプから流れる音はまるで私に語りかけているようだつた。悲しい時は悲しい音、嬉しい時は嬉しい音が聴こえる、まるで私の心を移す鏡のようだつた……

「…………」

「私は次第にエレキに惹かれていった、いつも一緒にいた。そして仲間と一緒に演奏する楽しみを見つけた。私は気が付いたときにはライブハウスのステージに立っていた……」

「…………」

「何度もメジャー『デビュー』の話はあった……だけじすべて断つたよ……なぜなら私はプロになることや、名を上げる事に興味が無かつたから、ただギターが好きなだけさ……ギターと一緒に何もいらなかつた……」

「…………」

「ある日、私はいつものヨリテライブハウスで演奏しているとある老夫婦が田に付いた……」

「どこにでもいるような老夫婦だ。2人で仲良くコーヒーを飲んでいる。」

「演奏に全く耳を傾けずに仲良く会話をしている……回りの客は奇声を上げ白目をむき発狂してゐるのに仲良く会話をしている……」

「…………」

「演奏が終わつた後、バンド仲間が私に言った。『あのバーさん達、喫茶店と間違えてんじゃねーの?』……と

「…………」

「そこで私は思いついたんだ、コーヒーを飲みながらゆっくりヘビメタを聞くことができるヘビメタ喫茶を……。次の日、私はバンドを辞めた。そしてヘビメタ喫茶を作る事に没頭したんだ……」

「…………」

「私は正直スケートの事は知らない……でもねミキティ人間好きな事をやつてる時が一番幸せなんだよ……」

「…………」

「自分にとつてスケートとは何なのかもう一度考えて」「らん」

マスターは美姫の肩をポンと叩き奥へと消えていった。

夜ミキティは布団の中で考えた…………

氷の上に何度も転倒した時の痛さ…………

初めてジャンプに成功した時の嬉しさ…………

スケートが好きで好きでたまらない自分…………

いつしか楽しさよりも『勝つ』事に目的が移り点数をとることが全てになっていた……

そして美姫は心中で自分に言い聞かせた…………

『スケートが好きだつた頃の自分に戻ろうー』…………と。

美姫は変わった。練習でもジャンプを次々と決める、回りから『4回転』と言われても気にならない、プレッシャーを感じることもない。

12月『グランプリファイナル決勝』、美姫は圧倒的強さで優勝した。

スケート場の外にはマスコミが待機している……

「藤原選手！ 藤原選手！ 前回の大会とはまるで別人のようでしたが？ 勝因はなんですか？」

「勝因ですか？ ヘビメタに出会ったことですかね～」

美姫はさらりと答え歩き出した、マスコミは口をあんぐり開けて固まっている……

この時、美姫はある野望を考えていた、それは女子スケート界初となる試みである……

時刻は23時。ヘビメタ喫茶ではマスターが閉店の準備に取りかかっている。

ガチャヤ！

扉が開いた。藤原美姫である……

美姫はマスターに歩み寄り新聞を渡した。  
新聞には……

『氷上の妖精、藤原美姫復活！』……と大きな見出しが載っている。

「//キティ頑張ったね」

マスターが言った。美姫は少し恥ずかしそうに笑い、カウンター席についた。

「次の大会……2月の世界選手権、もし私が優勝できたらお願ひがあります」

「…………」

「マスター、エキシビションでエレキギターを演奏して欲しい！私はマスターの弾くヘビメタの音を聞きながら演技をしたい…………」

「何エキシビションって？」

美姫はエキシビションとは何か説明した。マスターはヘビメタしか興味ないので知らないのです

「私はヘビメタ喫茶に出会わなかつたら今の自分はありません。そのヘビメタを教えてくれたマスターに弾いてほしい！ヘビメタを流す事で本当の自分が表現できると思うのだからお願ひします！」

美姫は頭を下げるマスターは満面の笑みで

「いいよ」と答えた。

後編に続く……

## 7話 // キトヤと鎌 中編（後書き）

エキシビションでヘビメタ生演奏はトロノオリエンピック、エキシビションで生バイオリンを見て思いつきました。

スケートはなぜかクラシック音楽を多用しています。ヘビメタで演技をする選手がいてもいいのについていつも思います。  
エキシビションなら良いはずですよねー

## 7話 ミキティと鎌 後編

2月『世界選手権』前方の評判通り藤原美姫がショート、フリー共に圧倒的強さで優勝した。

2月12日、エキシビション当日……

美姫の提案『ヘビメタ生演奏で演技』……この提案をもつとも嫌つたのが何を隠そう『日本スケート協会』である。すでに会場は満員の観客で埋め尽くされている、メダリスト達の華麗な演技で会場のボルテージは最高潮に達する。

選手控え室――――――――――

「気は確かにね藤原君……君のやるつとしている事はスケート界の冒涜に他ならない！――」

「そうだ！ そうだ！」

選手控え室にはスケート協会会長と美姫のコーチが凄い見幕で美姫を凝視している。

美姫の衣装は昨日までの可憐なレオタードではない、全身白塗り、トゲトゲヘビメタースーツに身を着飾っている。となりにはヘビメタ喫茶マスターが陣取っている……

「藤原君……君はスケートを何だと思ってるんだ……ヘビメタ生演奏？……ふざけるな！ 君はスケート界の未来を背負っていくんだぞ！」

「そうだ！ そうだ！」

美姫は会長を睨みつけた……

「Hキシビションでヘビメタは別に禁止されてる訳じゃないですよ  
ね？」

会長は顔を真っ赤にさせてマスターの方に近づいた。

「貴様だな！ 藤原君をそそのかしたのは！ ……おい化け物！ 何とか言えよ！ …！」

マスターは黙つて会長の顔を見下ろしている……

「私はねえ、貴様のような化け物がダツツイキライなんだよ！ ……  
！ ……ヘビメタなんて人間のクズが聞くものだ！ 貴様のようになあ」

「……」

「速い、汚い、うざい、3拍子揃ったヘビメタなんて消えてなくな  
れ！ ……おい、何とかいえよ！」

「……」

「だいたい、貴様と藤原君はすむ場所が違うんだよ！ ……だいたい

「……」

ガツ！

マスターはいきなり会長の胸ぐらを掴んだ、会長は恐怖に震える……

……

「け、警察呼ぶぞ……」

「呼べよー・ジジイでめえーにヘビメタがわかつてたまるかーーー！  
ビメタを侮辱するやつはゐるせねええーーー！」

ドカン！

会長は「口」と床を転がる。恐怖で背中が震えているのがわかる  
……」コーチはオロオロ動き回る。美姫は立ち上がりマスターに言  
つた。

「マスターそろそろ時間だよ、行きましょ…………それと……」  
チ今までありがとうございました……『じめんなさい……』

2人は眩い光のまつステージへと向かつた……背中越しに声が聞こえてくる……

「藤原君！」のままだとスケート界から除名だ！考へ直せ！ヘビメタ如きで選手生命をうしなうのか！だいたい君は伝統と言つ……

会長の言葉は美姫には届いていなかつた……

観客はざわついている、次は藤原美姫の演技なのだが妙な物があるのだ……アンプとギターである

ステージの中央にはアンプとギターが置かれているのだ。すると突然、会場の照明が落とされた…

「」

数秒の静寂……

暗闇の中、観客は次に起ることが予想できず期待と恐怖に襲われる

「…………」

カツ！

照明が照らされた、観客は自分の目を疑つた……ステージ中央、ギターを持った白塗りの化け物が立っているのだ！さらに中央に向かって歩いてくる者がいる、全身白塗り、トゲトゲヘビメタスースである。

「…………」

「…………」

「…………え？ キティ？」

「え？ 嘘だろ？ まさか……」

「あつー！ キティだー！ キティが全身白塗りの化け物で登場した！」

「えへへへへへへへへへへ！」

観客が驚くのも無理はない昨日まで氷上の妖精として可憐な衣装をまとっていたのだから…

美姫はマイクを手に取った。

「皆さん驚かせて」めんなさい……

でもこれが本当の私なんです……

もし私がヘビメタに出会わなければ今ここに居ません、スケートもやつていないのでしょう……今日は本当の藤原美姫を見てください――――――

美姫はマスターに目をやる、マスターがうなずいた……観客もかたずを飲んで見守る…

「…………」

『ギュワーン――――ジャシャジャシャ――』美姫はマスターのバッキングのリズムに合わせて首を振るつ――――

『ジャ！ジャ！ジャ！』

リフを全身で表現する！『キューーン……』

泣きのギターの時は表現力豊かに体をくねらしている！

『ダリヤリヤ――――』早弾きに移れば得意のジャンプを見せる！

観客も最初は戸惑いを見せたが徐々に演技に引き込まれていく――

「ミキティ！」

『ギュワーン――』

「ミキティ！」

『ブリヤアン――』

「//キテイ！//キテイ！//キテイ！//キテイ！//キテイ！//キテイ！//キテイ！//キテイ！//キテイ！

観客の興奮が最高潮に達した時だった美姫の体が自然と動いた……

ズシャツ カツ ザシャ！

4回転である！見事に成功した、ほどばしる汗！体がギシギシいつている！やめたくない！楽しい！ずっと演技を続けたい！美姫は涙をながしながら演技をした！

ジャン！

瞬の静寂…………… 全てを込めた3分40秒……………終わった。

「ブランボーミキティイ！」

感動した！

最高級

ありがとうございます！

ありがとうございます！

ベビメタ - // キティ - ベビメタ - // キティ - ベビメタ - // キティ -

ヘビメタ…!!キティ…ヘビメタ…!!キティ…ヘビメタ…!!キティ…

ステージの裏には「一チと会長が」ひとつそり見ていた。  
「会長」れは……」

「認めるしかあるまい……ヘビメタと藤原君が会場を一つにしたの  
だよ……私は食わず嫌いだったかもな……」

「会長……？」

「ヘビメタ……いいものだなあ……」

会長はだれにも聞こえないこえで呟いたのだった……

ヘビーメタルはいつの時代も嫌われ者だ……

でもヘビメタを知つて自分を取り戻した人間もいることを知つてほ  
しい

会場を一つにした事実知つてほしい

ヘビーメタルは本能の音楽である……

翌日の新聞の見出しにはこう書いてあった

『ヘビメタクイーン藤原美姫4回転決める！ありがと!!キティ！  
ありがとうヘビメタ！』……と



## 7話 // キティと鎌 後編（後書き）

長文よんでいただきありがとうございましたー・ビデオだつたでしょ  
うか？

作者としてはイメージ通りにけました。  
まあ演技を文字だけで表現するのは苦労しましたが、見せ場ですか  
らね。

ミキティがんばれ！  
オリンピックリベンジだ！

8話 学校にて……（前書き）

箸休め企画です。ストーリーはありません、つまらないです。ヘビメタに興味あるけど、どんなCD聞けば……って人は見てください。

「ぐじメタが聞きたい~~~~~?????？」

ここは名古屋私立蛇黒高等学校。放課後、佳奈、太郎、アンナが談笑している。

「うん、だつてアンナと太郎……最近ヘビメタの話しあしないじゃん……私も仲間に入れてよ……」

「一ノ子也」

太郎とアンナは満面の笑みで答えた。

「初心者おすすめの本ある?」

「そうだな、初心者はKISSから始めたらどうかな？」KISSは白塗りばかり注目されてるけど、素顔時代のKISS『REVE NGE』なんか最高だぜ！！！このアルバムはエリック・カーの死をメンバーが乗り越え彼に捧げたアルバム…………最高だ！」

「太郎君いやいや、初心者は『ポールギルバード』から入つたらどうかなあ？ポールと言えば『Mr.BIG』だけど私はソロになつてからの方がすきだなあ……」

ソロの時の方がホントに音楽を楽しんでるつて感じ メタル、ポップス、ジャズ、クラシック、ジャンルに捕らわれない彼のスタイルが見えるよ 『キング・オブ・クラウス』 『バーニング・オルガン』 がお勧めかな

「ポールならレーサーXはどうかな、アンナ?」

「ポールの『デビューバンド!』……あれは初心者には聞きにくいよ  
あー スピードメタルのレッテルを貼られた通り速いだけでお勧め  
は…… ヘビメタ中級だね」

「王道に戻つて『ブラック・サバス』なんかどうかな、メタルの  
帝王ではあるけど彼らの曲は独特の雰囲気がある!!--他のメタル  
バンドとは一線を画してゐるね、曲調はどうしつとした太いヘビメタ  
かなあ……サバスならベスト盤買いく~~~~~」

「初心者には『ハロウイン』『ガンマレイ』なんか良いと思つよ  
どちらも『カイハンセン』のバンド

『ハロウイン』の方が有名だけど『ガンマレイ』のが良いよ  
よりメロッティクでありメタル度が増してゐる、おすすめは『パワー』

。これがヘビメタだ! てバンドだよ」

「早弾き聞きたいなら『イングウェイ』つて言いたいけどあえてこ  
こでは言わないよ!」

『クリス・インペリテリ』彼こそが一般的に世界最速ギタリストだ  
といわれている! オルタネイト高速ピッキングが売り

「太郎君! ク里斯よりウェイ様のが速いよ! ! ! ウェイの真骨頂聞  
きたいならインストロメタル聞き! 」この辺は好みになっちゃ  
いますね

「さて王道に戻ろう! 『ディープパープル』つもう何もいうことは  
ないね世界で一番有名なロックバンドじゃないかな! 初期はクラシ  
ック色が強かつたけど徐々にハードロック化しこきた! おすすめC  
D? ……全部だ!」

「『マイケル・シャンカー』も忘れちゃいけないよ、マイケルは『スコーキオンズ』『UFO』『MSG』ってバンドを渡り歩いてるけど個人的には『MSG』が好きかなあ……ヘビメタと言うよりロックだね」

「アシカ、『ジジケン』はいかなあ？」

「太郎君いいこと言うね、炎のギタリスト、ジョージ・ジリンチのバンド！ おすすめだよ。個人的には『LONG WAY HOME』なんて好き。ジョージのギタープレイは必見。ベスト・オブ・ヘビメタ」

「いやメタリカの方が…………いやいやメガデスの方が…………」

――2時間後――

「ニヤドリームシアタ.....ニヤレインボー.....」

——3時間後——

「……せこせこせこせこ」

— 4 時間後 —

「あのね…」

「いやーひつのが…………いやあれが…………」

「あのね……すこません」

「あれが……いやこれが…………いやーひつが…………」

！んせまいす

「何？佳奈ちゃん？」

「結局なにがお勧めなんですか？」（怒）

「全部

『元』

## 9話 老いる前編（前書き）

虐待シーンがあります。苦手な方、注意が必要です。

## 9話 老いる前編

「アンナあの人変じやない？」

アンナと佳奈は学校帰り不思議な光景を目にする、ベビメタ喫茶前にひとりのおじいさんが立っている。年は80をゆうに越えているだらり……おじいさんは上半身裸で落ち着きがない、辺りをキヨロキヨロ見渡している……時々しゃがみ込んで何かを探している様子だ……

「何か探しているのかな？」

おじいさんがこちらに気づいた、アンナをジッと見ていく……

「おじこちゃんびつかれました?」

アンナと佳奈はおじいさんの元に歩み寄った。すると……

「アキ子オオオオオオオオオオ……！」

「キヤアアアアアアアア！」

いきなりおじいさんはアンナの手を握り涙を流している、アンナは恐怖で震えている……

「アキ子会いたかったよ……アキ子……」

「ひ、人違ひじゃないですか……わ、私はアンナ

！……

「キヤアアアアアアア！」

おじいさんはアンナを抱きしめた。アンナは涙を流してガタガタ震える。佳奈はオロオロと、どうしたらいいかわからない様子だ。そこへ騒ぎを聞きつけたアンナのママがベビメタ喫茶から出てきた。勿論全身白塗りだ。

「あんた何してんのオオオオオオオオオオオオ？」

ママに氣づいたおじいさんは今度はママの元に近づいた、ママの手をとる

「ア、ア、ア、アキ子？どうしてこんな醜い姿になつて…」

「はあ？」

「お父さんは悲しいぞ、ああ、家に戻ろ。……お父さんは先に戻つてるぞ」

「はあ？」

おじいさんはそつこつとベビメタ喫茶の中へ歩を進める。アンナと佳奈は2人で抱き合つて恐怖で動けない。ママは泣い顔で立つている。……

するとベビメタ喫茶から人の声とは思えないような断末魔の悲鳴が聞こえた。客は我先にと逃げるように帰つているのが目に入る。ママはベビメタ喫茶に急いで戻つた。

「…………」

セヒで見た光景は信じられない物だつた……

何とおじいさんはズボンを下げテーブルの上でうずくまつてゐる、顔はどこか殺氣立つて眉間にしわを寄せゐる……時々、悲鳴に似た吐息を漏らす……

「う・・！」・だ――！

「おじいさん――おじいちゃんではないイイイー・キシャアアアアア  
――」

おじいさんは田を丸くしてママの顔を見た。

「ん？ そりがあ……」

ママはおじいさんをトイレまで誘導した。アンナ達は化け物を見るよつな田でおじいさんを見ていく。

「ママアアア――あの人怖いよオ――」

「…………」

「アンナ、あの人は恐らく認知症よ。それも見当識障害も見られる重度の認知症ね……」

(認知症…なんらかの原因によって脳が萎縮する病気、見当識障害…今、ここがどこなのか判断出来なくなる障害、ママは介護福祉士の資格持つてるから詳しいんです )

5分程たち、おじいさんがトイレから戻ってきた…全裸である。パンツを履いてはいない。その光景を見てアンナはさらに悲鳴を上

げた。顔を手で覆つている。

「ヒツチイイイ！－！」

アンナにとって男の陰茎は初めて見る代物である、時々、好奇心から手の隙間から男の陰茎を凝視している。

「警察に保護してもいいしかないようね……」

…ママがそつと弦こた

10分後

「あのねえおじこさんーお巡さんも忙しいんだよー昨日とこに今田といいましたく……」

おじこさんの名前は『田代健一』と言つらじい。ここ最近しようとつ警察に保護されていることがわかつた。警察の人も困り果てているようだ。

「すいません…」

「すいませんですんだら警察はいらっしゃないよー」

アンナは警官のおまえが言つた心の中で突つ込みを入れた…  
その時、扉が開いた

ガチャー！

「すいません田代の娘ですー！」

「あ～アキ子さん、もう勘弁してくれよ…警察も来しないんですよ！」

「本当にすこません……わざおじこちゃん帰るわよ…」

その時ママになおじこさんの顔がどこか恐怖にひきつったように現えた。明らかに顔が曇っている……

「ア、ア、アキ子を呼んでくれ……」

おじこさんは怯えた声で呟いている、あきらかに声が震えている……

「何いってんの？私がアキ子よ、あなたの娘、田代アキ子よ…」

「あ…あ…あひ…」

アキ子はながば強引におじこさんをつれて帰った、警笛も殴打もして帰る……

ママは少し納得できない顔で見ていた。

「おかしいわね…」

その夜、田代家

異様な光景である

おじこさんは恐怖で顔が歪み、田には涙を浮かべている。四肢はロープで結ばれベッドに固定されてくる。これでは身動きはとれそうにない……

さらにも全裸にされ口には汚れた布が何重にも巻かれてくる、これでは悲鳴さえも出せないだろう……

前には一人の中年女性が立っている、右手には鞭が見える……

この異様な光景をどこか楽しそうな笑顔で見てくる。まるで悪魔の

ようである。そういう女性はアキ子である。おじいさんの実の娘アキ子である。

「ああ、おじいちゃんよ／＼も恥を欠かしてくれたわね、お仕置きの時間だ……」

アキ子はどこか嬉しそうに鞭を構えている、おじいさんは怯え顔を  
横に振る……鞭が宙を舞つた

ビシイ！

「フ、グ……ウグ……」

おじいさんは体をくねらせる。打たれた場所は無惨に皮が剥がれ赤く腫れ上がる……

アキ子の顔に鮮血が飛び散った、おじいさんは悲鳴を上げる」とも許されず、体をくねらせる。腹、太ももは皮が剥がれ中の肉が顔を見せる。

ル・シ・ラ・シ・ト・イ・

「…あ、う？」

おじいさんは口から真っ赤の泡を吹き、体をピクピクさせている。激痛に耐えられず失神したのだ……

「まだお仕置きは始まつたばかりよ？すぐに起」してあげるわ…」

アキ子はやつらつと裁縫道具の中から針を持ち出した。アキ子がおじいさんに近づき足の指……爪と肉の間に針をズブズブ入れている……

「フギヤー……アウアウウ……」

おじいさんは痛みで覚醒し顔を激しく振る、目には真っ赤な涙が流れ落ち必死に激痛に耐えている。

アキ子は全く気にせず針を押し込んでいる……

10指、全て針が入れられた……

アキ子は笑みを浮かべおじいさんを見下ろしている……

おじいさんは脂汗をながし、体中の皮膚はめぐれ血だらけだ……

体が恐怖で震えている。

「おじいちゃん、これにこりたら私に恥を欠かせない事ね……」

アキ子はおじいさんを残し奥の部屋に消えていった。

翌日

いつものようにアンナは佳奈と一緒に家に帰る。

アンナと佳奈の足が止まる……

ベビメタ喫茶の前では昨日と同じ光景が目に映つていて……

「おじいちゃん……」

アンナが呟いた：

後編に続く

## 9話 老いる前編（後書き）

虐待シーンを読んで気分を悪くされた方、…申し訳ありません。

正直、虐待シーンは迷いました…曖昧に書こうとも思いました…でもこれは実際に起こった事例を元に書いているのでこうしました。

団塊の世代が定年退職し今後、認知症の人数も増えるでしょう高齢者虐待は今以上に深刻な問題になります。

今現在、高齢者虐待が起ると『虐待』にばかり問題がいきます。でも根本的な事を忘れていませんか？

『介護』とは何なのか？『介護』の辛さをもつとわかつてほしい。

評価、感想いただけたら光栄です。

介護の意見もありましたらお寄せください。

## 9話 老いる後編

昨日と同じ光景である。おじこさんばかりをキラロキラ見渡し落ち着きがない、時々しゃがみこんでいる……

「アンナビツヒョウ……」

佳奈は不安そうにアンナの顔を見る。アンナはなにも言わずおじこを見ている。

「…………」

田川があった。おじこちゃんはアンナの顔をじっと見る……

「ア、ア、アキ子オオオオオオー！……！」

「…………」

「おじこちゃん、アキ子ちゃんは中元のよーがつを持ってねー。」

アンナはやうやくじつと佳奈を残してビメタ喫茶の中へ消えていった。  
(アンナも座りますねえ~)  
すぐ元気と一緒でてきた。佳奈は不安そうにアンナの顔を見る

…………

「…………ママ、ヤビツヒョウ…………？」

ママはおじこを凝視する、するとお姉さんをすべて帰らせた。  
『ママ』と看板を下ろす。

「アンナ……おじこさんを中に入れてきて、コーヒー入れるわ……それと佳奈ちゃんは家に帰らしなさい」

アンナは佳奈を家に呼び寄せ、おじこさんをベビーメタ喫茶へと誘導する。テーブルには3つコーヒーが置かれている。おじこさんはコーヒーを手に持った。

「アキ子も美味しいコーヒー入れれるよ! なったんだね……お父さんは嬉しいよ……」

アンナヒヤヒヤは満訝とした表情でおじこさんの顔を見た。

「ママ……警察呼ぶ?」

「……………」

ママはおもむろに立上りがりおじこさんの服をめくった。

『一』

「な、何をするんだアキ子! 恥ずかしいじゃないか!」

「…………」

「…………」

「……………アンナ…車のキーを回してきて……………今すぐ病院よーいのねここれをおからへ虐待受取下さい……………」

「は、はー…」

アンナは車のキーを回した、重低音が響く。  
スカイラインGT-R・R34である。（ママはヘビーメタロヴェで  
あり介護福祉士であり走り屋でもあるのだ。）

古びた小さい病院である中老いた医師が怪訝そうな顔でおじいさん  
を見ている。隣の看護師もあまりに酷い傷に顔を歪ませる。医師が  
言いつぶやうとママに向った。

「うーん…これは間違いなく虐待を受けた傷ですねえ…転んで出来  
た傷ではないねえ」

ママは黙つてこな、アンナは悲しそうな顔をする

「どうせしても、そのアキ子たとせりひりに連れて来ましょ  
う。話はそれからです」

ママとアンナは頷いた。おじいさんはアキ子を待つ間、不安そうな  
顔で回りをキョロキョロさせる。看護師がなだめている。程なくし  
てアキ子がやつてきた……

「娘のアキ子ですか？おじいちゃんが迷惑かけて  
れり、おじいちゃん家に帰るわよー！」

アキ子はおじいさんを強引に連れて帰らしめる、そのとき強く肩  
をもたれた。ママである。

「あんたに話がある…」

「な、何ですかあなたは！化け物見たいな顔して変態さんです  
か？」

「はい、今警察呼びますね~」

医師が言つた。その時ママが物凄い形相で医師を凝視した。

「先生待つてください！私はマイツに話がある……警察はその後にしてください！」

「そ、うは言つてもね、虐待なんて知つたからにはね、」

「せー！」

医師はママの鬼のような顔にママのこいなりになつた。ママはアキ子を院長室に連れて行くその間もアキ子は「虐待って何のことですか?」つと、しらを切つていろがママの田は誤魔化せないぞ!

2人に重い空気が流れる…沈黙を打ち消すようにママが言った。

「虐待の事実を認めますか?」

「はあ？何訳の分からない」といつてんのお？」

アキ子がふてぶてしく言った。ママはアキ子の顔をじっと見る。ア

キ子は顔をそらした

そしてママはアキ子を語りかけるが、優しく口を開いた。

「私はね昔在宅介護をやつてていたの……

そこで何人もの虐待を見てきたわ……

でもね、私は虐待した人は攻めたくなかったわ……介護が……介護がどう  
れほど辛いものか知ってるから……私の言いたいこと……わかる?」

アキ子はママの顔を見た。目には涙が浮かんでいる。アキ子は首を  
横に振る。

「でもねアキ子さん、みんなおじいちゃん、おばあちゃんが死んだ  
ときには後悔してたわ……

『私は取り返しの付かないことをした』って私に言うの……  
だからアキ子には後悔してほしくないの……これだけはわかつ  
て、私はあなたの味方よ……」

「……」

「……」

「う、う、う……」

アキ子は涙を流しママの顔を見た。

「アキ子さん、おじいちゃんを施設に入所させようとは思わなかっ  
たの?」

「…………まわりが…………近所の手前入れれないって……世間体が  
悪くなるから入れれないって…………」

「…………そう……」

「だから1人で介護してたんだ」

アキ子がママの顔を見たアキ子の顔は涙でぐぢやぐぢやになつていい  
る…

「辛くて…辛くてたまらない…おじいちゃんなんて消えてなくなれ  
つて思つた…自分の感情がとめれないの…『ごめんなさい…』」

「…………」

「アキ子さん、私はね自分を犠牲にしてまで介護なんてしちゃいけ  
ないと思つてるの……」

もう、あなたは十分やつたわ。誰もあなたを攻められないわ……」

「…………」

「…………」

「…………」

「お前します

周りには野次馬が沢山あふれている、アキ子はパトカーに向かう。  
顔はやつれ骨だけ妙に浮き出ている…アキ子はパトカーに乗る前ママに一礼した……

夏の暑い日の悲しい出来事であった。

ママとアンナは無言で帰宅している、辺りはすでに真っ暗である。  
満開な星空がアンナの顔を映す

だがこの時は氣づいていなかつた、一台のトラックが猛烈なスピードで近づいてくるのを……

アンナは角を曲がる

ブオオー・トラックが近づいている。

どんどん音は大きくなる……

ヘビメタ喫茶前にはパパが2人の帰りを待っていた。アンナがパパに氣づき走り出した……

次の瞬間

アンナの田の前が真っ白になる

ガシャーン……

『さよならヘビメタ喫茶』に続く……

## 9話 老いる後編（後書き）

実は最終話『さよならヘビメタ喫茶』と同時にかいてました。  
だんだん最終話に持つていきたい気持ちが強くなり少し淡白な仕上  
がりになり反省しています。

さらに根本的ミスが一つ…おじいさんのその後を書くことを忘れて  
いました。ちなみにおじいさんは特養に保護されることになりました。

評価、感想、意見を貰えると助かります。

わよならへヒメタ喫茶～～事故～～（前書き）

9話『老いる』の続きです。

## わよならヘビメタ喫茶～～事故～～

アンナは強烈な光に目が眩む……

永遠とも思える時間……

人は死ぬ瞬間、人生を走馬灯のように垣間見るという……  
この時、アンナは自分の人生を見ていたのかもしれない……

18年を一瞬で……

アンナの人生はヘビメタに彩られていた…………物事がついた時からヘビメタを聞かされた……

そして今はヘビメタ好きな彼氏までいる。  
決して裕福でない家庭、端から見たら化け物にしか見えない白塗りの両親……

でもアンナは両親が好きだった、白塗りが好きだった、ヘビメタが好きだった……

トラックとの距離1M切ったかな?…どうでもいいかそんな事……

アンナは覚悟を決めまぶたを閉じた。

『私は死ぬ……もつすぐトラックにぶつかる……』

『短い人生だつたけど楽しかったよ、みんなありがと』

『パパ、ママ今までありがとうございました、そしてゴメンネ……』

『ベビーメタ... ありがとう』

『え？』

アンナが死を覚悟した瞬間、横から強烈な力で押された……

# ガシャーン！

「」  
「」  
「」  
「」

トラックの横にはアンナの父が頭から血を流し仰向けに倒れていた。

「パパアアアア―――！嫌よ…起きてよ…嘘でしきう

嘘つて言つてよオオオオオオ——！

- 7 -

救急車のサイレンの音が耳に入る…… 救急隊員が白塗りのパパを担架に乗せる……

そこから記憶はない

-۲۰-

機械の音である、アンナとママはパパの手を強く握っていた。いつものパパではない全身に管を通して、白塗りの顔は泥で黒く汚れている……

「パパ……………ごめんね……私がいけないの……………」  
グスン……………」

「アンナのせいじやないわ……今は祈りましょう……絶対パパは大丈夫よ……」

ママはアンナの肩を叩いた。すると後ろから大柄な男性が近づいてきた。

「主治医の布袋です、お父さんは非常に危険な状態です」

アンナとママは布袋に詰め寄つた……

「主人は助かるんでしょうか?」

「先生!パパを殺さないで!お願い!パパを助けてあげてエエエ!――！」

2人は涙ながらに訴えた布袋は「最善を尽くします」と一言、言つてその場を後にする。その時、後ろからくる人影に気付いた

「マスターが事故にあつたつてホントか――！」

キングである。キングは汗をダラダラながし、息が上がりつている。全身の血管が浮き出ているのがわかる……

アンナがキングに詰め寄つた……

「パパが……パパが……パパが……」

キングの目に全身を通した白塗りが見える。キングは更に息を荒立てるゆっくり、ゆっくりとパパの元へ歩を進める。

「ううそだろお……マスター曰く開けろよ……おい……俺とギター

キングがマスターの手を握った。後ろではアンナが声を出して泣いている

「キング……私がいけないの……パパは私をかばうために自分からトラックに突っ込んだの……」

キングはアンナの話を無言できいている

「私がいけないの……………グスン……………」

— 1 —

「グスン……私が……私が……グスン……う……う……」

- 1 -

キングは立ち上がりアンナの肩を持ち、強引に後ろに向かう。アンナは涙を流し、下を向いていた。

「アンナちゃん……顔を上げて見ろ。」

アンナはゆっくり顔を上げる、そこには何十人という人が工場の外にいた……みんなヘビメタ喫茶の客である

「マスター！」

「絶対俺たちが助けるからな！」

「大丈夫！心配するなあ！」

「マスターのギター聞きたいよーー！」

「オススメCD教えてくれよ」

「頑張れよ！」

「マスター愛してるぜ！」

「ベビメタは永遠に不滅だ！」

アンナは呆然と見て、『キング』は優しく言つた。

「これだけじゃないぜ……外には何百という数の人間がいるんだぜ……アンナちゃん、それだけの人にマスターは愛されていたんだ！ベビメタ喫茶は愛されていたんだ！これだけの人がマスターを信じてるんだ！だから絶対に大丈夫だ！」

「キング……う…う…うウワアアアアアアア！」

アンナはさりに強く涙した。辺りはすでに田は落ち病院内にも静寂の時間が訪れる。アンナとママは食事も取らず、ずっとパパの手を握つた。ずっと、ずっと握つたのだった……

翌朝

ベビメタ喫茶の前には女が立つて、いかにもキャラリーウーマンといった雰囲気を醸し出している。全身をブランドで固めた衣類はいつたい幾らするのだろうか？

女はドクロをチラツと見て階段を登る……  
ドアの取っ手に手をかけた……しかし……

開かない……当然だ中には誰もいないのだから。女は怪訝そうな表情をする

「おい、マスターならいなイゼー！」

女は後ろを振り返る、そこにはキングが立っていた。キングは階段を登り女に近づいた。

「マスターに何か用か？」

キングは女の顔をじっと見た。

「あんた……ひょっとして高嶋……あや子か？」

「それが何か？」

「別にただ、女子アナの帝王とまで呼ばれる人がなんでこんな所に…」

「そんな事はどうでもいいわ、何故マスターがいないのか聞かせてもらおうかしらっ。」

キングはあや子に昨日の事をしゃべった。マスターが事故にあったこと、病院で全身を管で繋がれていたこと、そしてマスターの命が危ないこと。キングは全てを話した。そして全てを聞き終えたあや子は

「そう」と一言呴きその場を後にした。

あや子はそのまま夜布団の中で眠れずにいた…

ヘビメタ喫茶、最初は仕事で仕方なく行つた。でも何か引っかかる物があつたのか、あや子はその後も数回足を運んだ。

あや子は行けば行くほどヘビメタ喫茶が好きになつていつた。もうあや子にとってヘビメタ喫茶は大切な場所であつた。  
そのヘビメタ喫茶マスターが生死の境をさまよつている…

あや子は涙が止まらず、布団の中で声を出して泣いたのだった。

続く…

さよならヘビメタ喫茶～～事故～～（後書き）

さよならヘビメタ喫茶は4部構成でいく予定です

わよならへビメタ喫茶～～テレビで～～

藤一番テレビ第1~6スタジオ、朝の人気番組『田覚よテレビ』の現場は独特的の緊張感が漂っている。見てる視聴者には伝わらないだろう、生放送という番組の宿命かもしれない。

カメラの向こうには藤きつての美人アナ、高島あや子と中野美奈子が写っている。

「みんな」のあ～元気のみなもとあ～

「アヤパン、アヤパン 最近寒くなりましたねえ～？」

「…………」

あや子は全く聞いていないのか、どこかおかしい。美奈子の切り返しに反応できていない。美奈子は肘でこすりた。

「え？ あ、うん… 寒くなりましたね」

お天気コーナーに移る時も、いつもは元気よく

「あいちゃん」と言つただが今日はボーとしていて忘れてるようだ……やはりおかしい…

いつもの高島アナではない、皆そう思っていた。どこか上の空である。体調が悪いわけでもなさそつだ。そんな様子で『田覚よテレビ』も終盤、占いコーナーまでやってきた。

「…………」

あや子は予想通り、占いコーナーに移る気配はない。隣の大塚アナ

が肘でつつく。

「え？ あつはい？ 口こ……いや……」

急にあや子は黙り込み下を向いた。隣の大塚アナは口をキヨロキヨ  
口させ助けを求める。

そしてあや子は顔を上げた、目が据わっている。いつものあや子で  
はないのは明らかだ。

大塚アナは恐怖にも似た感情が込み上げる。

そしてあや子はゆっくり話しだした。

「こんな事は本来テレビで言つてはならないことだと思います  
でも、少し私事を聞いてください……」

現場全体に緊張が走る。大塚アナは口をあんぐり開け

「ちょっと何いってんの？」と、あや子の肩を揺らすがあや子は氣  
にも止めていない。

「昨日私の大切な人が交通事故に遭いました、その人はヘビメタに  
命をかけ念願のヘビメタ喫茶を開店させました…………でも今はヘ  
ビメタ喫茶に入ることはできません…………今、その人は病院のベッ  
ドで生死の境をさまよっています」

本来、いちアナウンサーがこんな事をするとすぐにプロデューサー  
が辞めるよう指示を出すのだが全く指示を出す気配はない。この時  
プロデューサーは何を思っていたかはわからない……

「視聴者の皆様、お願いです…祈つてください…絶対助かると祈つ  
てください…」

「私と一緒に…祈つてください…ひ…ひ…ひ」

あや子はその場にしゃがみこみ涙を流している。隣の大塚アナはどうしたらいいか分からずプロデューサーの顔を見る。プロデューサーが立ち上がる。

「おい、『トクダネ』に回せ!」

すぐにはテレビの画面は小倉アナのアップ画面になる、小倉アナの滑舌の良い声が響いた…

『田原よテレビ』のスタジオではあや子が涙をポタポタ流している。中野美奈子が心配そうに見ている…プロデューサーがあや子の前に来る

「高島君、自分が何をしたかわかつているのか?始末書ものだぞ」

あや子が首を縦に振る。

「テレビを私物化するとは、アナウンサー失格だな…」

あや子は何も言わず聞いている、涙が止めどなく流れ落ちる。

「……」

「高島君、涙を拭いたらプロデューサー室に来なさい…」

藤一番テレビ第16スタジオには重苦しい空気だけが流れた。口を開く者はだれもいなかつた…

「失礼します」

あや子が扉を閉める。広い豪華な部屋である。シャンデリアがあり、本棚には沢山の書物がある。奥にはパソコンが一台プロテューサーが覗きこんでいる。

あや子はプロテューサーの前に立つた、おもむろに胸ポケットから何かを取り出す。

『辞表である』

「高島君やはつせ」までの覚悟か……」

「…………」

「はい、「迷惑をおかけしました……」

あや子は一礼しその場を後に使用とした  
ところが……

「高島君……待ちたまえ、これを見やう……」

「…………まだ何か？」

「いいから」のパソコンを見る……」

あや子はパソコンを覗き込んだ。  
そこに止ま……

メールである。先程の放送を見て、ヘビメタ喫茶マスターを氣づかうメールが山のようにきてる……北は北海道から南は沖縄まで……

あや子の目に涙が浮かぶ

「君のアナウンスでこれだけの人が心を動かされたんだ…」

「……」

「高島君、確かに君のやつたことは許されることではない…だけど、今日のアナウンスは高島あや子の歴史の中で間違いなく最高のアナウンスだ」

「……」

「久しぶりに本物のアナウンスを聞いたよ

「……」

「それが言いたかっただけだ…」

プロデューサーが頭を下げた。あや子は涙が止まらず、その場を逃げるようにして帰った。

アナウンス室に戻る……そこであや子が見た物は想像を越えていた…

すっかり辺りは暗くなってしまった。街灯の光だけが辺りを包む。看護師たちが横で夜勤の申し送りをしている。

昨日と同じ光景だ。アンナがいくら声をかけてもパパは反応しない。キングも心配そうに見ている… ICU周辺には昨日と同様、ヘビメタ喫茶の客でひしめきあっている。

そこへ奥から女が歩いてきた、女は全身をバーバリーで着飾り、深

い帽子とサングラスを掛けた。これでは顔が分からないバッグはグツチだらうか……

両手には大きいダンボールを抱えている。少し滑稽にも思える。女はアンナの前に立ち、ダンボールを置いた。帽子とサングラスをとる。

「た、高島さん……」

「アンナちゃん、覚えててくれんだ……これを見て」

あや子はダンボールのフタをとった。そこには何千、いや何万という手紙が入っていた。

「アンナちゃんこの手紙はね全てお父さんを氣すかう手紙よ……これだけじゃないわ、この10倍はアナウンス室に届いてるの……」

アンナの目から涙がこぼれ落ちる。

「日本中のこれだけの人があんたが応援してるんだよ……私自身これだけの反響があるとは思わなかつたわ……」

アンナは声を出して泣いた。嬉しくて、嬉しくてたまらない。あや子は優しくアンナを抱きしめてあげている。あや子も涙を浮かべてママもキングも泣いている、周りの人も泣いている、看護師も泣いている、医師も泣いている。

泣き声だけがエヒヒに響きわたっている……

「SORRY!—！」

後ろから怒鳴り声が聞こえた！みんなが後ろを振り返る、そこには2人の外人が立っている。1人は髪がモジヤモジヤでサングラスを掛けた黒尽くめの男…

1人は長身で髪も整っている。白い革ジャンを来てている。

誰一人として会ったことはない…しかし顔は見たことがあった…

みんな信じられない表情で男達を見る…  
大抵の事じや驚かない高島あや子出さえ言葉がでない…  
自然と男達の前には道ができる

一歩、二歩とちかづいてくる…

男達はアンナの田の前まできた…

アンナは目を丸くし震えが止まらない…

「嘘でしょ」…

「信じられない…」

「……」

「……」

「ポール・ギルバートとマーティ・フリードマンじゃない……！」

続く

## さよならへビメタ喫茶 ～～奇跡の時間～～（前書き）

ポールがマスターのために『FIGHTER!』という曲を演奏しますが、あれはマスター一人のために書き下ろした曲なのでどのCDにも存在しませんDEUS

## さよならヘビメタ喫茶 ～奇跡の時間～

信じられるだろうか？いち女子高生の目の前にはヘビメタ界の巨人ポール・ギルバードとマーティ・フリードマンが立っているのだ…誰も口を開ける者はいない。皆、自分がおかれている現状が把握できぬ…アンナは目を丸くして2人を見ている。

「ゆ、夢じゃないよね…あつ痛！ゆ、夢じゃない…………」

アンナは自分のホッペをつねつて夢じゃないことを理解した。マーティは笑った。

「ボクタチハ、アサノ morinogoto ミテ、カンドウシマシタ。ボクタチハ、アナタタチノ、チカラニナリタイ」

マーティはポールを見た。ポールは頷く…

「アト、friendツレテキタ、モウスグクル」

その時、病院内は轟音に包まれた。病院の外から轟音が響いているようだ…アンナは慌てて窓を開けた…

『…』

信じられない光景である。なんと一台のヘリコプターがホバリングしているのだ！それだけではない何台もの高級リムジンが見える…アンナは訳が分からず、マーティの顔を見た。

「ミンナ、ボクタチノ、friendネ！モウスグクルカラ、マッテテ」

「と、と、友達って誰つれてきたんですか？？」

「アワテナイ、アワテナイ、タトエバ…………アツ－ウワサヲス  
レバ」

マークティが手を振った。そこには紳士的な白人男性がいた。白人男性はマークティに手を振る。  
みんながこの顔を知っている…

「エ、エ、エ、エリック・プラクトン…………！」

アンナは口をあんぐり開け体の震えが止まらないさうにマークティは追い討ちを掛けるよつた言つた

「マダ、イルヨー！」

アンナは自分の目を疑つた…そこには音楽界のスーパースターが続々と入つて来るではないか！アンナは叫んだ！

「イングヴェイ！ランディ・ローズ！マイケルシェンカ！布袋寅泰！TAK松本！高見沢！インペリテリー！リットー・ブラックモア！エアロスマス！ペタルーシー！ジョージリンチ！」

「…………」

「…………」

「嘘でしょ、信じられない…こんなことって…」

アンナは涙を流し、震えている。マーティが優しく肩を叩いた。

「ジャンル、チガエド、キモチ、ミンナオナジ！」

「……」

「ファザー、タスケタイキモチオナジ！」

「……」

「キヨウハ、ファザー、ノタメニ、ライブヤル、チョットマッテテ

「……」

スーパースター達は一旦その場を後にし駐車場に向かう、駐車場ではすでにドラム、ギター、ベース…がスタンバイしてあり直ぐにでもライブが始めれそうである。アンナ達は窓からライブを見る。今でもこの現実が信じられない……

奇跡である……

ポール・ギルバードがギターを持った……

「キヨウハ、ファザーノタメニ、エンソウシマス、キイテクダサイ

「……」

「FIGHT!!」

奇跡の瞬間である…

世界のスーパー・ギタリスト達が無名のヘビメタファン一人のために演奏する…

あるものはアリゾナからヘリコプターできた…

あるいはツアー中だというのに…

みんな思いは一つ… 1人の男を助けたい…

音楽という偉大な神が男に最後のプレゼントをくれたのかも知れない…

1時間58分…

奇跡の時間が終わる…

その瞬間、アンナの悲鳴が聞こえた…

病院内が慌ただしくなる…

誰もが信じられなかつた…

エリックもポールもマークも言葉が出ない…

奇声にも似た悲鳴が木靈する…

ヘビメタ喫茶、マスター22時59分、永眠…  
続く…

## さよならヘビメタ喫茶 ～夢の終わり～

誰もがこの状況を受け入れられない…アンナはパパの手を握り、必死に叫ぶ…だがもうパパは目を覚ますことはない…エリックもポールもマー・ティもその場に立ち尽くす。

ライブが終わると同時にパパは息を引き取ったのだ。アンナの叫び声だけが虚しく病院内に響き渡つた…奇跡の時間はパパの死によつて幕を閉じた。

焼香の匂いが漂う…

回りには沢山の花がパパの遺影に飾られている…アンナの耳にはお経さえもヘビメタに聞こえる…だがアンナはもう涙を流してはいいない…

ヘビメタ喫茶マスターの葬儀は異様な雰囲気に包まれている。

参列者は全員白塗りの化け物に変身している、申し合わせた訳ではない、皆、マスターを思う心から白塗りになつたのだ…あの高島あや子でさえ白塗りの化け物だ…

さらにスーパー・ギタリスト達も白塗りだった…  
エリック・プラクトンさえも…

出棺の時、どこからか美声が聞こえてきた。ポールである…TOO

B E W Y I S Y O U を熱唱している…

人の価値とはその人が死んだ時に分かるという…

これだけの人がヘビメタを愛し、マスターを愛していた…

ヘビメタを心から愛した男の最期…

「ありがとう！マスター

「天国にいってもギター弾けよ！」

「マスター忘れないよ」

「THANK！」

「マスター愛してるぜ」

「マスター最高！」

「ヘビメタ最高！」

奇声にも似た叫び声とともにマスターは出棺した……みな声を上げて泣く……偉大なる素人はこの世から去った……

あれから1ヶ月…

ママもアンナも変わってしまった。アンナは学校にもいかず部屋に閉じこもる、食事もろくに取ってはいけない。ママもアンナと同様に時々、涙を流し食事も喉に通らない…ヘビメタ喫茶のドアの前には貼り紙が見える。

『今までありがとうございました。ヘビメタ喫茶閉店致しました。』

…と

ヘビメタ喫茶はパパが1から作り上げたものだ、パパがない今続ける意味もない…2人はそう考えていた…

勿論、毎日何百人と言う人がヘビメタ喫茶を訪れ『やめないで！』と声を上げている。だが2人に声は届かない。

男が来たのはそれから2週間ぐらいたった時のことだつた。その日アンナとママはテレビもつけずに、無言で朝食を取つてゐる。するとドアの外から男の感高い声が響いてきた。

「アケテクダサイ！アケテクダサイ！」

ママは無言で立ち上がりドアを開けた。そこには全身黒の衣服に身をまといた男が立つてゐる。マーティ・フリードマンである。ママは田を丸くした。

「マ、マ、マーティ・フリードマン…ビ、ビ、ビ…」

「……テレビハ、ドゴテスカ？」

「ハア？」

「イイカラーテレビ！」

マーティが有無を言わざず、ズカズカと入つてくる。アンナも驚きを隠せない様子だ。マーティはアンナを見て一礼した。マーティはリモコンのスイッチを押す。

「ミナサン、コレマミテクダサイ！」

マーティがそつまつと、2人は声が出なくなつた…テレビから女の声が聞こえてくる。

「アンナちゃん…今は辛いけど、頑張つて！お父さんの夢はあなた

達が守るのよー。」

「うふっと高島あや子が『』つていてる。隣で大塚アナの叫び声が聞こえ  
る…

さうマーティはチャンネルを回す。

「ポールさん今の曲は新曲ですか？」

「NO! イマノハ、アンナノ、ファザー、ササゲル、キョクデス!  
アンナ FIGHT!」

ポール・ギルバードである。さうマーティはチャンネルを回す。

1人の女性がテレビに『』つた。スケートをしているのだが、違和感  
がある…なんと曲にヘビメタを流しているのだ！  
するとナレーターが言った。

「藤原美姫選手によると、『今日の演技は天国のマスターに捧げる  
…』と言つておられますが、どうこうう事でしょ?』

さうマーティはチャンネルを回す。

「ヘビメタ喫茶、復活の署名お願いします…」

「お願いします！」

テレビにはキングと太郎と佳奈が『』つていた。ヘビメタ喫茶復活の  
署名をしていくようだ…

どのチャンネル回してもヘビメタ喫茶の事しか言つていない…

…

アンナとママは口を開くことも出来ず、ただただ聞いていた…するとマーティはリモコンを置き2人に優しく言った。

「ミンナガ、ヘビメタキッサ、フツカツヲ、ノゾンテイマス…」

「……」

「アナタタチノ、スベキコトハ、ナンデスカ?」

「……」

「ナミダヲ、ナガスコトテスカ?」

「……」

「ファザーノ、アイシタ、ヘビメタキッサ、マモツテクダサイ…」

「……」

「ボクハ、ソレダケ、イイタカッタ…」

「……」

「FIGHT!」

マーティはそれだけ言うとヘビメタ喫茶から帰つていった。

2人の間にはテレビの音だけが流れる…ヘビメタ喫茶を愛してくれるのはこんなにいる…

どれほどの時が流れただろう、ママは顔を上げアンナに言った…

「マー・ティさんの言つ通りかもしれない…

パパはヘビメタの良さをみんなに知つてもう一つ為にヘビメタ喫茶を作つた…私達が頑張らないと天国のパパは悲しむかもね…」

アンナは頷いた。そしてドアの貼り紙を破り捨てたのだった。

次の日よりヘビメタ喫茶のドアには『OPEN』と書かれた札が目に入ったのだった。

Hピローグへ…

わがなりぐじメタ喫茶　～～夢の終わり～～（後書き）

「Jリームで読んでくれてありがとうございます。最終話を書いていてなぜか『電車男』を思い出しちしました。

## ヒューローク

ヘビメタ喫茶…そこはこの世と魔界の境かもしれない…

ヘビメタ喫茶に行くときは覚悟してほしい…きっと魔界達があなたを魔界に誘つから…

魔界達は元気良く奇声を上げる。でも怖がらないで、それが彼らのスタイルだから…

それと今日は皆様に新店長を紹介したい…

高島あや子…知ってるか？本物の高島あや子だぜ、彼女はアナウンサーという職を辞めて、ヘビメタ喫茶に来てくれた。これほど店長にふさわしい人材はいない…

滑舌の良い奇声を聞かせてくれる…

ヘビメタの知識も半端ではない…

さらに頭脳明晰と来ている、さすがは女子アナかいの帝王と呼ばれるだけのことはある。

でも言つておくが、みんなの知ってる可愛い高島あや子じゃないぜ…彼女も魔界の住人になつたからな…奇声を発つする白塗りの化け物だ。

人生とは何があるかわからない…でもピンチをチャンスに変えるのはあなたしだいだ。

とにかく歩いてみる事だ道にそれたつていい…

その道も歩いていけば結果あなたを幸せにするかもしない…

ヘビメタが好きなら」と「とんヘビメタを追求したほうがいい…

人間やりたい」とやつてるときが一番幸せなんだ…

あや子もアンナもママもヘビメタが大好きだ。

彼らがいる限りヘビメタ喫茶は永遠に不滅だ。

もしあなたが街でヘビメタ喫茶を見つけたら一度訪れてほしい…

あなたもきっとヘビメタの良さがわかるから…

『J愛読ありがとう』『ありがとうございました。』

## Hピローケ（後書き）

『ヘビメタ喫茶』「J」愛読ありがとうございます。感想、評価ください  
た方々心より感謝します。勿論見てただけでも感謝します。

この物語の続編は書もませんが、他の作品にリンクさせよつとは思っています。

ありがとうございました作者『メタカツ』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3012d/>

---

ヘビメタ喫茶

2010年10月30日22時49分発行